

十円札

芥川龍之介

青空文庫

ある曇った初夏しよかの朝、堀川保吉ほりかわやすきちは悄然しやうぜんとプラットフォオムの石段を登って行つた。と云つても格別大したことではない。彼はただズボンのポケットの底に六十何銭しか金のないことを不愉快に思つていたのである。

当時の堀川保吉はいつも金に困つていた。英吉利語イギリスを教える報酬ほうしゆうは僅かに月額六十円である。片手間かたてまに書いている小説は「中央公論ちゆうおうこうろん」に載つた時さえ、九十銭以上になつたことはない。もつとも一月五円の間代まだいに一食五十銭の食料の払いはそれだけでも確かに間まに合つて行つた。のみならず彼の洒落しやれるよりもむしろ己惚うぬぼれるのを愛していたことは、——少くともその経済的意味を重んじていたことは事実である。しかし本を読まなければならぬ。埃及エジプトの煙草たばこも吸わなければならぬ。音楽会の椅子いすにも坐らなければならぬ。友だちの顔も見なければならぬ。友だち以外の女人にょにんの顔も、——とにかく一週に一度ずつは必ず東京へ行ゆかなければならぬ。こう云う生活欲に駆かられていた彼は勿論原稿料の前借ぜんしゃくをしたり、父母兄弟に世話を焼かせたりした。それでもまだ金の足りない時には赤い色硝子いろがらすの軒燈けんとうを出した、人出入の少い土蔵造りの家うちへ大きい画集などを預けることにした。が、前借の見込みも絶え、父母兄弟とも喧嘩けんかをした今は、——いや、今は

それどころではない。この紀元節きげんせつに新調した十八円五十銭のシルク・ハットさえとうにもう彼の手を離れている。……

保吉は人のこみ合つたプラットフォオムを歩きながら、光沢こうたくの美しいシルク・ハットをありありと目の前に髻髻ほうふつした。シルク・ハットは円筒えんとうの胴に土蔵の窓明りを仄めほのかせている。そのまた胴は窓の外に咲いた泰山木たいざんぼくの花を映うつしている。……しかしふと指に触れたズボンの底の六十何銭かはたちまちその夢を打ち壊こわした。今日はまだやつと十何日かである。二十八日の月給日に堀川教官殿と書いた西洋封筒せいようふうとうを受け取るのにはかれこれ二週間も待たなければならぬ。が、彼の楽しみにしていた東京へ出かける日曜日はまだあしたに迫っている。彼はあしたは長谷や大友おおもともと晩飯を共にするつもりだった。こちらにないスコットの油画具あぶらえのぐやカンヴァスも仕入しいいれるつもりだった。フロイライン・メルレンドルフの演奏会へも顔を出すつもりだった。けれども六十何銭かの前には東京行ゆきそれ自身さえあきらめなければならぬ。

「明日あすよ、ではさようなら」である。

保吉は憂鬱まぎを紛まぎらせるために巻煙草まきたばこを一本啣くわえようとした。が、手をやったポケットの中には生憎あいにく一本も残っていない。彼はいいいよ悪意のある運命の微笑びしょうを感じながら、

待合室の外に足を止めた物売りの前へ歩み寄った。緑いろの鳥打帽をかぶった、薄い痘痕のある物売りはいつもただつまらなそうに、頸へ吊った箱の中の新聞だのキャラメルだのを眺めている。これは一介の商人ではない。我々の生命を阻害する否定的精神の象徴である。保吉はこの物売りの態度に、今日も——と言うよりもむしろ今日はじつとしてはいられぬ苛立たしさを感じた。

「朝日をくれ給え。」

「朝日？」

物売りは不相変目を伏せたまま、非難するように問い返した。

「新聞ですか？ 煙草ですか？」

保吉は眉間の震えるのを感じた。

「ビール！」

物売りはさすがに驚いたように保吉の顔へ目を注いだ。

「朝日ビールはありません。」

保吉は溜飲を下げながら、物売りを後ろに歩き出した。しかしそこへ買いに来た朝日は、——朝日などはもう吸わずとも好い。忌ましい物売りを一蹴したのはハヴァ

ナを吸ったのよりも愉快である。彼はズボンのポケットの底の六十何銭かも忘れたまま、ブラットフォオムの先へ歩いて行つた。ちょうどワグラムの一戦に大勝を博したナポレオンのように。……

岩とも泥とも見当のつかぬ、灰色をなすつた断崖は高だかと曇天に聳えている。そのまた断崖のてっぺんは草とも木とも見当のつかぬ、白茶けた緑を煙らせている。保吉はこの断崖の下をぼんやり一人歩いて行つた。三十分汽車に揺られた後、さらにまた三十分足らず砂埃りの道を歩かせられるのは勿論永久の苦痛である。苦痛？——いや、苦痛ではない。惰力の法則はいつのまにか苦痛という意識さえ奪ってしまった。彼は毎日無感激にこの退屈そのものに似た断崖の下を歩いている。地獄の業苦を受くることは必ずしも我々の悲劇ではない。我々の悲劇は地獄の業苦を業苦と感ぜずにいることである。彼はこう云う悲劇の外へ一週に一度ずつ躍り出していた。が、ズボンのポケットの底に六十何銭しか残っていない今は、……

「お早う。」

突然声をかけたのは首席教官の栗野^{あわの}さんである。栗野さんは五十を越しているであろう。色の黒い、近眼^{きんがんきょう}鏡をかけた、幾分^{いくぶん}か猫背^{ねこせ}の紳士^{しんし}である。由来^{ゆらい}保吉の勤めている海軍の学校の教官は時代を超越した紺サアジ^{こん}以外に、いかなる背広をも着たことはない。栗野さんもやはり紺サアジの背広に新らしい麦藁^{むぎわら}帽^{ぼう}をかぶっている。保吉は丁寧にお時儀^{じぎ}をした。

「お早うございます。」

「大分蒸^{だいぶんむ}すようになりましたね。」

「お嬢^{ぢやう}さんはいかがですか？ 御病氣^{ごびやうき}のように聞きましたが、……」

「難^{ありがと}有^{きとう}う。やつと昨日退院^{きのう}しました。」

栗野さんの前に出た保吉は別人のように慇懃^{いんぎん}である。これは少しも虚礼ではない。彼は栗野さんの語学的天才に頗^{すこぶ}る敬意を抱^{いだ}いている。行^{ぎやう}年^{ねん}六十の栗野さんは羅匈語^{ラテン}のシイザアを教^{おし}えていた。今も勿論英吉利語^{イギリス}を始め、いろいろの近代語に通じている。保吉はいつか栗野さんのAsino——ではなかったかも知れない、が、とにかくそんな名前の伊太^{イタ}利語^{リイ}の本を読んでいるのに少からず驚^{きやう}嘆^{たん}した。しかし敬意を抱いているのは語学的天

才のためばかりではない。栗野さんはいかにも長者らしい寛厚の風を具えている。

保吉は英吉利語の教科書の中に難解の個所を発見すると、必ず栗野さんに教わりに出かけた。難解の、——もつとも時間を節約するために、時には辞書を引いて見ずに教わりに出かけたこともない訣ではない。が、こう云う場合には栗野さんに対する礼儀上、当惑の風を装うことに全力を尽したのも事実である。栗野さんはいつも易やすと彼の疑問を解決した。しかし余り無造作に解決出来る場合だけは、——保吉は未だにはつきりと一思案を装った栗野さんの偽善的態度を覚えている。栗野さんは保吉の教科書を前に、火の消えたパイプを啣えたまま、いつもちよつと沈吟した。それからあたかも卒然と天上の黙示でも下つたように、「これはこうでしょう」と呼びかけながら、一気にその個所を解決した。保吉はこの芝居のために、——この語学的天才よりもむしろ偽善者たる教えぶりのために、どのくらい栗野さんを尊敬したであろう。……

「あしたはもう日曜ですね。この頃もやつぱり日曜にや必ず東京へお出かけですか？」

「ええ、——いいえ、明日は行かないことにしました。」

「どうして？」

「実はその——貧乏なんです。」

「常談じょうだんでしよう。」

栗野さんはかすかに笑い声を洩もらした。やや鳶色とびいろの口髭くちひげのかげにやっと犬齒けんしの見えるくらい、遠慮深そうに笑ったのである。

「君は何しろ月給のほかに原稿料もはいるんだから、莫大ばくだいの収入を占めているんでしよう。」

「常談でしょう」と言っただのは今度は相手の保吉である。それも栗野さんの言葉よりは遙はるかに真剣に言っただつもりだった。

「月給は御承知の通り六十円ですが、原稿料は一枚九十銭なんです。仮に一月ひとつきに五十枚書いても、僅かに五九四十五円ごぶつくですね。そこへ小雑誌しょうざっしの原稿料は六十銭を上下じょうげしているんですから……」

保吉はたちまち熱心にいかに売文べいぶんに糊口ここうすることの困難であるかを弁べんじ出した。弁じ出したばかりではない。彼の生来せいらいの詩的情熱は見る見るまたそれを誇張し出した。日本の戯曲家や小説家は、——殊に彼の友だちは慘憺さんたんたる窮乏きゆうぼうに安んじなければならぬ。はせまさお長谷正雄は酒の代りに電気ブランを飲んでいる。大友雄吉も妻子さいしと一しよに三疊の二階を借りている。松本法城も——松本法城は結婚以来少し楽らくに暮らしているかも知れ

ない。しかしついこの間まではやはり焼鳥屋へ出入^{しゅつにゅう}していた。……

「Appearances are deceitful ですかね。」

栗野さんは常談とも真面目^{まじめ}ともつかずに、こう煮^にえ切らない相槌^{あいづち}を打った。

道の両側^{りょうがわ}はいつのまにか、ごみごみした町家^{ちやうか}に変わっている。塵埃^{ちりほこ}りにまみれた

飾^{かざ}り窓と広告の剥^はげた電柱と、——市と云う名前はついていても、都会らしい色彩はどこ

にも見えない。殊に大きいギヤントリイ・クレエンの瓦屋根の空に横^{よこた}わっていたり、その

また空に黒い煙や白い蒸気の立っていたりするのは戦慄^{せんりつ}に値^{あた}いする凄じさである。保吉は

麦藁帽^{むぎわらぼう}の底の下にこう云う景色を眺めながら、彼自身意識して誇張した売文の悲劇に感

激した。同時に平生尊重する瘦^やせ我慢^{がまん}も何も忘れたように、今も片手を突こんでいたズボ

ンの中味を吹聴^{ふいちやう}した。

「実は東京へ行きたいんですが六十何銭しかない始末^{しまつ}なんです。」

保吉は教官室の机の前に教科書の下調^{したしら}べにとりかかった。が、ジャットランドの海戦

記事などはふだんでも愉快に読めるものではない。殊に今日は東京へ行ききたさに業を煮やしている時である。彼は英語の海語辞典を片手に一頁ばかり目を通した後、憂鬱にまたポケットの底の六十何銭かを考えはじめた。……

十一時半の教官室はひっそりと人音を絶やしている。十人ばかりの教官も栗野さん一人を残したまま、ことごとく授業に出て行つてしまった。栗野さんは彼の机の向うに、——と云つても二人の机を隔てた、殺風景な書棚の向うに全然姿を隠している。しかし薄蒼いパイプの煙は栗野さんの存在を証明するように、白壁を背にした空間の中へ時々かすかに立ち昇っている。窓の外の風景もやはり静かさには変りはない。曇天にこぞつた若葉の梢、その向うに続いた鼠色の校舎、そのまた向うに薄光つた入江、——何もかもどこか汗ばんだ、もの憂い静かさに沈んでいる。

保吉は巻煙草を思い出した。が、たちまち物売りに竹篋返しを食わせた後、すっかり巻煙草を買うことを忘れていたのを発見した。巻煙草も吸われないのは悲惨である。悲惨？——あるいは悲惨ではないかも知れない。衣食の計に追われている窮民の苦痛に比べれば、六十何銭かを歎ずるのは勿論贅沢の沙汰であろう。けれども苦痛そのものは窮民も彼も同じことである。いや、むしろ窮民よりも鋭い神経を持っている彼は一層の苦

痛をなめなければならぬ。窮民は、——必ずしも窮民と言わずとも好い。語学的天才たる栗野さんはゴツホの向日葵ひまわりにも、ウォルフのリイドにも、乃至はヴェルアアランの都会の詩にも頗る冷淡すこぶに出来上っている。こう云う栗野さんに芸術のないのは犬に草のないのも同然であろう。しかし保吉に芸術のないのは驢馬ろばに草のないのも同然である。六十何銭かは堀川保吉に精神的饑渴きかつの苦痛を与えた。けれども栗野廉太郎れんたろうには何の痛痒つうようをも与えないであろう。

「堀川君。」

パイプを啣くわえた栗野さんはいつのまにか保吉の目の前へ来ている。来ているのは格別不思議ではない。が、禿はげ上あがつた額ひたいにも、近眼きんがん鏡きょうを透すかした目にも、短かに刈り込んだ口髭くちひげにも、——多少の誇張を敢てすれば、脂光やにびかりに光ったパイプにも、ほとんど女人にょにんの嬌羞きやうしゆうに近い間の悪さの見えるのは不思議である。保吉は呆氣あつけにとられたなり、しばらくは「御用ですか？」とも何とも言わずに、この処子しよしの態さまを帯びた老教官の顔を見守っていた。

「堀川君、これは少しですが、……」

栗野さんはてれ隠しに微笑びしょうしながら、四つ折よおりに折った十円札を出した。

「これはほんの少しですが、東京行の汽車賃に使って下さい。」

保吉は大いに狼狽した。ロックフェアに金を借りることは一、再ならず空想している。しかし栗野さんに金を借りることはまだ夢にも見た覚えはない。のみならず咄嗟に思いついたのは今朝滔々と栗野さんに売文の悲劇を弁じたことである。彼はまっ赤になつたまま、しどろもどろに言い訳をした。

「いや、実は小遣いは、——小遣いはないのに違いないんですが、——東京へ行けばどうかなりまし、——第一もう東京へは行かないことにしているんですから。……」

「まあ、取ってお置きなさい。これでも無いよりはましですから。」

「実際必要はないんです。難有うございますが、……」

栗野さんはちよつと当惑そうに啣えていたパイプを離しながら、四つ折の十円札へ目を落した。が、たちまち目を挙げると、もう一度金縁の近眼鏡の奥に嬌羞に近い微笑を示した。

「そうですか？　じゃまた、——御勉強中失礼でした。」

栗野さんはどちらかと言えば借金を断られた人のように、十円札をポケットへ収めるが早い、そこそこ辞書や参考書の並んだ書棚の向うへ退却した。あとにはまた力のない、

どこかかすかに汗ばんだ沈黙ばかり残っている。保吉はニッケルの時計を出し、そのニッケルの蓋ふたの上に映うつった彼自身の顔へ目を注そそいだ。いつも平常心へいじょうしんを失ったなと思うと、厭いやでも鏡中の彼自身を見るのは十年来の彼の習慣である。もつともニッケルの時計の蓋ふたは正確に顔を映すはずはない。小さい円の中の彼の顔は全体に頗すこぶる朦朧もうろうとした上、鼻ばかり非常にひろがっている。幸いにそれでも彼の心は次第に落着きを取り戻しはじめた。同時にまた次第に栗野さんの好意を無むにした気の毒さを感じはじめた。栗野さんは十円札を返されるよりも、むしろ欣然きんぜんと受け取られることを満足に思つたのに違いない。それを突き返したのは失礼である。のみならず、――

保吉はこの「のみならず」の前につむじ風に面するたじろぎを感じた。のみならず窮状を訴えた後のち、恩恵を断るのひきようは卑怯ひきようである。義理人情は蹂躪じゅうりふしても好いい。卑怯者になるだけは避けなければならぬ。しかし金を借りることは、――少くとも金を借りたが最後、二十八日の月給日まで返されないことは確かである。彼は原稿料の前ぜん借しゃくなどはいくらたまつても平気だった。けれども栗野さんに借りた金を二週間以上返さずにいるのは乞食こじきになるよりも不愉快である。……

十分ばかり遡しゅんじゆん巡じゆんした後、彼は時計をポケットへ収め、ほとんど喧嘩けんかを吹っかけるよ

うに昂然と栗野さんの机の側へ行つた。栗野さんは今日も煙草の缶、灰皿、出席簿、万年糊などの整然と並んだ机の前に、パイプの煙を靡かせたまま、悠々とモリス・ルブランの探偵小説を読み耽つている。が、保吉の来たのを見ると、教科書の質問とも思つたのか、探偵小説をとぎした後、静かに彼の顔へ目を擡げた。

「栗野さん。さっきのお金を拝借させて下さい。どうもいろいろ考えて見ると、拝借した方が好いようですから。」

保吉は一息にこう言つた。栗野さんは何とも返事をせずに立ち上つたように覺えている。しかしどう云う顔をしたか、それは目にもはいらなかつたらしい。爾来七八年を閲した今日、保吉の僅かに覺えているのは大きい栗野さんの右の手の彼の目の前へ出たことだけである。あるいはその手の指の先に（ニコティンは太い第二指の爪を何と云う黄色に染めていたであらう！）四つ折に折られた十円札が一枚、それ自身嬌羞を帯びたように怯まず怯まず差し出されていたことだけである。……

保吉は明後日あさつての月曜日まよに必ずこの十円札を栗野さんに返そうと決心した。もう一度念のために繰り返せば、正ただにこの一枚の十円札である。と言うのは他意のある訣わけではない。前借の見込みも全然絶え、父母兄弟とも喧嘩をした今、たとえ東京へ出かけたにもせよ、金の出来ないことは明らかである。すると十円を返すためにはこの十円札を保存しなければならぬ。この十円札を保存するためには、——保吉は薄暗い二等客車の隅に発車の笛を待ちながら、今朝けさよりも一層いっそう痛切に六十何銭かのばら銭せんに交まじった一枚の十円札を考えつづけた。

今朝よりも一層痛切に、——しかし今朝よりも憂鬱いげんにではない。今朝はただ金のないことを不愉快に思**う**ばかりだった。けれども今はそのほかにもこの一枚の十円札を返さなければならぬと云う道德的興奮を感じている。道德的？——保吉は思わず顔をしかめた。いや、断じて道德的ではない。彼はただ栗野さんの前に彼自身の威厳いげんを保ちたいのである。もつとも威厳を保つ所以ゆえんは借りた金を返すよりほかに存在しないと云う訣わけではない。もし栗野さんも芸術を、——少くとも文芸を愛したとすれば、作家堀川保吉は一篇の傑作あを著わすことに威厳を保とうと試みたであろう。もしまた栗野さんも我々のように一介いっかいの語学者にほかならなかつたとすれば、教師堀川保吉は語学的素養を示すことに威厳を保つこ

とも出来たはずである。が、芸術に興味のない、語学的天才たる栗野さんの前にはどちらも通用するはずはない。すると保吉は厭でも応でも社会人たる威厳を保たなければならぬ。即ち借りた金を返さなければならぬ。こう云う手数をかけてまでも、無理に威厳を保とうとするのはあるいは滑稽に聞えるかも知れない。しかし彼はどう云う訣か、誰よりも特に栗野さんの前に、——あの金縁の近眼鏡をかけた、幾分か猫背の老紳士の前に彼自身の威厳を保ちたいのである。……

その内に汽車は動き出した。いつか曇天を崩した雨はかすかに青んだ海の上に何隻も軍艦を煙らせている。保吉は何かほつとしながら、二三人しか乗客のいないのを幸い、長ながとクツシヨンの上に仰向けになった。するとたちまち思い出したのは本郷のある雑誌社である。この雑誌社は一月ばかり前に寄稿を依頼する長手紙をよこした。しかしこの雑誌社から発行する雑誌に憎悪と侮蔑とを感じていた彼は未だにその依頼に取り合わずにいる。ああ云う雑誌社に作品を売るのは娘を売笑婦にするのと選ぶ所はない。けれども今になって見ると、多少の前借の出来そうなのはわずかにこの雑誌社一軒である。もし多少の前借でも出来れば、——

彼はトンネルからトンネルへはいる車中の明暗を見上げたなり、いかに多少の前借の享

楽ようらくを与えるかを想像した。あらゆる芸術家の享樂は自己発展の機会である。自己発展の機会を捉とらえることは人天じんてんに恥はずる振舞ふるまいではない。これは二時三十分には東京へはい急行車である。多少の前借を得るためにはこのまま東京まで乗り越せば好いい。五十円のある。——少くとも三十円の金さえあれば、久しぶりに長谷や大友と晩飯を共に出来るはずである。フロイライン・メルレンドルフの音楽会へも行ゆかれるはずである。カンヴァスや画の具も買われるはずである。いや、それどころではない。たった一枚の十円札を必死に保存せずとも好いいはずである。が、万一前借の出来なかつた時には、——その時はその時と思わなければならぬ。元来彼は何のために一粟野廉太郎の前に威嚴を保ちたいと思うのであろう？ 粟野さんはなるほど君子人かも知れない。けれども保吉の内生命ないせいめいには、——彼の芸術的情熱には畢ついに路傍の行人こうじんである。その路傍の行人のために自己発展の機会を失うのは、——畜生、この論理は危険である！

保吉は突然身震みふるいをしながら、クツションの上に身を起した。今もまたトンネルを通り抜けた汽車は苦しうに煙を吹きかけ吹きかけ、雨交あめまじりの風に戦そよぎ渡つた青芒あおすすきの山峡まかいを走っている。……

翌日よくじつの日曜日の日暮れである。保吉は下宿の古藤椅子ふるとういすの上に悠々と巻煙草へ火を移し

た。彼の心は近頃にならない満足の情じょうに溢あふれている。溢あふれているのは偶然ではない。第一に彼は十円札を保存することに成功した。第二にある出版書肆しよしは今しがた受取った手紙の中に一冊五十銭の彼の著書の五百部の印税を封入してよこした。第三に——最も意外だったのはこの事件である。第三に下宿は晩飯の膳ぜんに塩焼の鮎あゆを二尾いっぴきつけた！

初夏の夕明ゆうあかりは軒先に垂たれた葉桜の枝に漂ただよっている。点々と桜の実をこぼした庭の砂地にも漂ただよっている。保吉のセルの膝ひざの上に載った一枚の十円札にも漂ただよっている。彼はその夕明りの中にしみじみこの折目のついた十円札へ目を落した。鼠色の唐艸からくきや十六菊ぎくの中に朱の印を押した十円札は不思議にも美しい紙幣である。橢円形だえんけいの中の肖像も愚鈍ぐどんの相は帯びているにもせよ、ふだん思っていたほど俗悪ではない。裏も、——品ひんの好い緑に茶を配した裏は表よりも一層見事である。これほど手垢てあかさえつかずにいたらば、このまま額が縁くぶちの中へ入れても——いや、手垢てあかばかりではない。何か大きいこの上に細かいインクの楽書らくがきもある。彼は静かに十円札を取り上げ、口の中にその文字を読み下した。

「ヤスケニシヨウカ」

保吉は十円札を膝の上へ返した。それから庭先の夕明りの中へ長ながと巻煙草の煙を出した。この一枚の十円札もこう云う樂書の作者にはただ酔^{すし}にでもするかを迷わせただけに過ぎなかつたのであろう。が、広い世の中にはこの一枚の十円札のために悲劇の起つたこともあるかも知れない。現に彼も昨日^{きのう}の午後はこの一枚の十円札の上に彼の魂^{たましい}を賭^かけていたのである。しかしもうそれはどうでも好^{いい}い。彼はとにかく栗野さんの前に彼自身の威厳^{まっと}を全うした。五百部の印税も月給日までの小遣^{こづか}いに当てるには十分である。

「ヤスケニシヨウカ」

保吉はこう呟^{つぶや}いたまま、もう一度しみじみ十円札を眺めた。ちやうど昨日^{きのう}踏破したアルプスを見返えるナポレオンのように。

(大正十三年八月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utyama

校正：かとうかおり

1999年1月5日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十円札

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>